

# 継承制を廃止した仏教寺院における檀徒増加の実態

## —大分・妙瑞寺の非継承墓申込者を対象とした事例研究—

井上治代

### 1. はじめに<sup>(1)</sup>

#### 1-1 研究の背景

日本社会は、不連続のライフサイクルを持った夫婦制家族（核家族）が主流になって久しい。さらに家族の個人化が進み、少子高齢・人口減少・無縁社会に突入している現在、家族の連続性をその特徴にもつ「家」意識は著しく希薄化した。それは「家」を基盤にした仏教寺院の、運営基盤であるところの檀家制度への忌避感となっても顕れている。

このような社会構造の変化から近年、仏教寺院の危機を問う論考が目立つようになった。児玉修著『仏教崩壊』や、鶴飼秀徳著『寺院消滅』、水月昭道著『お寺さん崩壊』といったように「崩壊」や「消滅」といったセンセーショナルな現実を突きつけた本が相次いで刊行されている〔児玉2003、鶴飼2015、水月2016〕。

一方でその実態を救うべく「日本仏教の再生」を視野に入れた著述も見受けられる。それには2つの傾向がある。その1つは、上田紀行著『がんばれ仏教！—お寺ルネッサンスの時代』や、磯村健太郎著『ルポ 仏教、貧困・自殺に挑む』のように、突出した社会的活動を行っている僧侶や寺院をとりあげ、仏教再生の方向性を示唆する論考である〔上田2004、磯村2011〕。

これらに対し、櫻井義秀は「地域社会において特色ある活動をなす僧侶には注目が集まるが、法務・檀務に専念する住職の役割は評価されることが少ないと思われる」〔櫻井2012:152〕と述べ、「寺院仏教の将来を展望するうえで、何かしら特別なことをしないとダメなのではないか」という実践型の寺院（Doing）のみが注目される現況は見なおされてしかるべきではないか」という見解を示している〔櫻井2016:421〕。そして櫻井や川又俊則編著『人口減少社会と寺院』では、人と地域を結ぶ寺のありようを丹念な調査をもって拾い上げている〔櫻井・川又2016〕。大谷栄一もまた「とくに二〇〇〇年代以降、特徴的な社会活動を行っている仏教者や仏教団体に社会的な注目が集まっている」と指摘し、「寺院の日常的活動こそが再検討される必要がある」と「寺院の日常的活動と寺檀関係—浄土宗」の中で述べている〔大谷2016:217〕。

筆者は2つの視点のうち後者を支持し、本研究は葬祭儀礼を担ってきた伝統仏教の視座から分析を試みる。ただし本研究は、日本仏教の再生をテーマにもちつつも、あくまでも

事例研究の域を出ず、この命題に関してただちに結論づけるものではない。

## 1-2 研究の視角・目的・用語の定義

これまで多くの日本人は永続する「家」のシンボルとして墓や仏壇で先祖を祀り、檀家となって祭祀を仏教寺院にゆだね、寺を護持してきた。この家的システムの継続を可能ならしめているのは家族や墓の「継承」である。しかし継承システムは、現代家族に適合的でないことは自明である。このように継承が困難なとき、人々は脱継承、脱檀家の方向に向かうことが予測される。だからといって、人間として死者を弔う行為が大幅に消失しているかといえば、必ずしもそうとは思えない。

そこで本研究の目的は、仏教寺院における脱「家」システムの分析をするにあたり、その指標を「脱継承」とした。なぜならば、家の系譜的連続性という特徴が消失し、夫婦一代限りの夫婦制家族に移行するには、系譜的連続性を可能ならしめている継承制から離脱すること、つまり「脱継承」が条件となるからである。そして「人々は超世代的な連続を強いる墓の継承や檀家制度から離脱すれば、個人の信仰、あるいは個人の追悼形式として、慣れ親しんだ仏教を選ぶ気持ちがある」という仮説を立てて検証を試みる。

そのさい大分市にある昌光山妙瑞寺（日蓮宗・菊池泰啓住職）で開設した、継承を前提とせず、檀家要件のない非継承墓<sup>(2)</sup>「安穏廟」と「桜葬」の申込者を対象とし、脱継承の実態を分析する<sup>(3)</sup>。さらに檀家要件がないにもかかわらず申込者の約4割が「檀徒」になっているという事実に着目する。

はじめに用語の定義をしておくことにしたい。継承を前提としない墓を「非継承墓」という。さらに「家」という、集団が単位で継承を必要要件とする「檀家」の語と、個人を単位とした継承不要の「檀徒」「信徒」の語について、その概念を分けて考える。調査対象である妙瑞寺でも、家族を単位とし継承義務のある「檀家」概念をやめ、継承の義務のない個人が単位の「檀徒」「信徒」という用語と概念に変更した<sup>(4)</sup>。また「会員」とは、旧来からの「檀徒」に対して、非継承墓（「安穏廟」「桜葬」）を申込んだ全ての人をいう。そして寺院運営上「会員」は「信徒」と位置づけられ、その中で葬儀を寺に依頼し寺の護持を担うという意思表示をした者が「檀徒」となる。

## 2. 大分・妙瑞寺とその改革

大分市にある昌光山・妙瑞寺は1659年（万治2年）の創設で、1989年に菊池泰啓・現住職が25代目の住職を継承した<sup>(5)</sup>。菊池住職は1998年9月に、非継承墓「安穏廟」を開設した。その墓は、死や葬送の事柄に真正面から向き合う寺の姿勢を表わすということで、寺の山門の前面に位置している。2011年12月までの約13年で60基が完売した。

妙瑞寺には、後方に古い檀徒の土葬墓が約300基あり、一家族が20～30の墓をもち先祖

の供養を行っていた。そこに埋葬されているのは古い先祖だけで、近年の家族は近くの共有地に「累代墓」を作り、そちらに埋葬していた。非継承墓の安穩廟ができ、墓の管理が将来的に困難になるであろうという菊池住職による啓発が進んだ結果、従来土葬墓は既にある累代墓へ集約（改葬）された。そして2011年4月に、その地を再整備し次なる非継承墓「桜葬」（樹木葬墓地）を開設した。現在、一般墓は2基のみで、それ以外に歴代住職の土葬墓と無縁供養塔兼先々代住職の埋葬墓がある。



写真1. 1998年、山門前につくられた「安穩廟」 写真2. 2011年、旧土葬墓を改葬した跡に開設した「桜葬」

「桜葬」の開設と同時に菊池はもう一つの改革を行っている。それは先にも述べたように、「檀信徒」の区分を明確にしたことである。そして墓はみな非継承墓とした。これからの社会の在り方を見据え、世代的に継承していく檀家制度は適合しないし、墓も同様であると考えたからである。

菊池の「檀徒・信徒」の区分をまとめると、次のようになる。「檀信徒」とは、「檀徒・信徒」を意味し、「檀徒」とは仏教の教えを信奉し、寺を護持し、葬儀や法事などを妙瑞寺に依頼できる人である。ただし、檀家と違って継承の義務がなく、個人が単位で一代限りとする。葬送儀礼を妙瑞寺住職のもとで行っても、丸2年（3回忌）を経たとき、檀徒をやめることも選択できる。「信徒」は寺院の行事にゆるやかに参加している人々で、安穩会員や桜葬会員は、檀徒になることを意思表示していなければこれに当たる。

### 3. 調査の概要

本調査の目的は、妙瑞寺の非継承墓「安穩廟」「桜葬」を申し込んだ会員108名（檀徒に移行した48名、非檀徒60名）を対象とし、①「非継承墓」申込者の家族の状況や選択理由を分析することと、②会員から檀徒に移行する契機が何かを探ることである。そのために下記の面接調査と質問紙調査（自由記述中心）を実施した。

## I. 住職への面接調査

日時：2017年6月22-23日、12時間、対象：全会員108名（檀徒48名・非檀徒60名）。

妙瑞寺では、寺に一般的にある「過去帳」だけでなく「現在帳」をつけている。現在帳は、面談をしたときなどにその内容を書き込んだ個票で、系図があり、それをもとにした親族との関係性や諸事情が書き込まれている。筆者も菊池住職も個人情報保護に十分配慮するため、筆者が直接「現在帳」を見るのではなく、菊池住職より会員に関する契約時の諸事情や供養状況などについて12時間にわたって聞き取った。

## II. 「非継承墓」申込者への質問紙調査

日時：2017年8月22日～9月1日、対象：全会員108名（檀徒48名・非檀徒60名）、有効回答数：65（檀徒27・非檀徒38）、方法：郵送法による質問紙調査。調査票の返送は、妙瑞寺・菊池住職に気を遣わず本音で回答できるように、返送先を筆者側の住所にした。調査内容：①契約している墓の種類、②墓を選んだ理由、③信仰について、④死者への供養について、⑤家族状況、⑥墓地契約後の年数、⑦属性（性別・年齢・職業・子どもの有無と人数と性別・同居家族）、⑧既に埋葬されている人、⑨継承の予定、⑩檀徒の有無、⑪妙瑞寺への希望、⑫「安穩廟」及び「桜葬」の気に入っている点などである。また自由記述形式で下記の質問を行っている。

★檀徒のみ自由記述：最初に「檀徒にならなくて良い墓」と知った時どう思ったか／檀徒になろうと思った動機／「檀徒になって良かった」と感じる時／「檀徒でないほうが良かった」と感じる時。★非檀徒のみ回答：今後、檀徒（一代限り）になる意志はあるか／今後、葬儀などの供養儀礼を妙瑞寺に依頼する気持ちはあるか等。

## 4. 「非継承墓」申込者の属性と選択理由

妙瑞寺の住職への面接調査では、「現在帳」をもとに、非継承墓の申込者108名を対象に、家族の状況や申し込み理由について長時間にわたり聞き取りを行った。その結果、申込時の状況としては、「娘だけ」（27.8%）が一番多く、「子どもなし」（13.9%）、「未婚」（12.0%）、子どもが「遠居」（10.2%）、「男子に事情があり」（6.5%）、「再婚」（6.5%）、「離婚」（5.6%）、「夫婦別墓」（4.6%）、「住職の親族」（3.7%）、「経済的理由」（2.8%）、「日蓮宗へのこだわり」（1.9%）の順となった。「その他」（4.5%）は、「若年である／累代墓が管理不能／女性が墓継承不能な弟に代わって実家の墓を買う／ペットの近くに眠りたい／男子死亡」などである。

続いて「非継承墓」申込者への質問紙調査（有効回答数は檀徒27名、非檀徒38名、計65名）をみると、「非継承墓を選んだ理由」（上位3つ以内）は「檀徒」（27名）で一番多い理由は「住職が信頼できる」（66.7%）で、「合同祭祀をしてくれるから」と「住んでいるところの近くなので」が同数で（40.7%）、「継承しなくてもいいお墓だから」（37.0%）

の順となり、その他の選択肢は少なかった。一方「非檀徒」(38名)では、最多が「合同祭祀をしてくれるから」(57.9%)で、続いて「継承をしなくてもいいお墓だから」(55.3%)、「住職が信頼できるから」(47.4%)となり、「墓石を立てず自然でいい」(42.1%)、「『桜』が好きだから」(42.1)といった選択肢を選ぶ人が多かった。

#### 〈考察〉

先に筆者が行った新潟・妙光寺(日蓮宗・小川英爾住職)の非継承墓「安穩廟」の申込者調査でも、一番多かったのは「娘だけ」で、妙瑞寺と同じである。妙光寺では続いて「息子がいる」「子どもなし」「未婚」「離婚」「再婚」の順であった<sup>(6)</sup>。妙瑞寺は2番目の「息子がいる」がなく、続く「子どもなし」「未婚」は同数である。しかし妙光寺と分け方が違うだけで、妙瑞寺の「遠居」の中の男子や「男子に事情があり」の男子を加えると、「息子あり」が上位にあがってきて妙光寺と同様になる。このように非継承墓は、父系男子で継いできた家の継承制からは不利な関係にある「娘」や「子どもなし」「未婚」というケースの人が申し込んでいる。しかし一方で、息子がいても、息子が遠居や病気を患っていたりして継承できないケースも多くなっていることがわかった。

非継承墓の選択理由では、檀徒は葬儀や供養儀礼を通じて住職との繋がりが密であることから「住職が信頼できる」「合同祭祀をしてくれるから」という選択肢を支持する人が多い。また「住んでいるところの近くなので」といった地域に密着した活動が支持されていた。一方、非檀徒は「合同祭祀をしてくれるから」や「継承をしなくてもいいお墓だから」といった意見が多く、墓の継承を嫌い、供養は個別ではなく合同祭祀を好んでいることがわかった。

### 5. 信仰・供養儀礼に対する考え

「非継承墓」申込者への質問紙調査(有効回答数は檀徒27名、非檀徒38名、計65名)で、「教団を持つ既成の宗教を信じている」という項目に対して、選択肢を設けて尋ねたところ、最多は「仏教で日蓮宗」(26.2%)で、続いて「キリスト教」(21.5%)と「仏教だが特定の宗派はない」(21.5%)が同位であった。ここで注目すべきは「新興宗教」「神道」はゼロだが、キリスト教信者が意外と多いことである。しかも檀徒である人たちの中で「キリスト教」を選んだ人が5名(18.5%)いた。また檀徒と非檀徒の比較で言えば、当然のことながら檀徒に「仏教で日蓮宗」の回答が多く、非檀徒でも「仏教だが特定の宗派はない」が(26.3%)であったことを確認しておきたい。

供養儀礼についての質問では、檀徒と非檀徒の違いが明らかになった。「日本では『月参り』(月命日などに、僧侶が檀信徒の家に行って、お経を上げ菩提を弔うこと)を行わないところもあるが、伝統的な月参りを仏式で行うのは良いことだ」ということについてどう思うか尋ねた。檀徒は「そう思う」(33.3%)「どちらかというそう思う」



(37.0%)を合わせた肯定意見が70.0%になり、非檀徒のそれは28.9%と低い。逆に非檀徒の「あまり思わない」(57.9%)と「そうは思わない」(13.2%)を合わせると否定的な意見が71.1%と高かった。

また「葬儀の後33回忌まで、あるいはそれ以上、仏式の回忌法要を行うことは良いことだ」についてどう思うかを問うと、檀徒は「まあそう思う」(37.0%)というやや肯定的な意見が一番多いものの、2番目に多いのは「あまり思わない」(33.3%)という否定的な意見であった。非檀徒では「あまり思わない」(55.3%)と「そうは思わない」(13.2%)を合わせて68.5%が否定的であった。

#### 〈考察〉

檀徒が信仰として「仏教で日蓮宗」を選ぶことはわかるが、非檀徒でも「仏教だが特定の宗派はない」(26.3%)という回答があり、仏教が意識下にあることに注目したい。また回忌法要について檀徒の約7割が支持しているが、非檀徒は約7割が不支持であった。非檀徒は、特定の宗派はもたないが仏教は受け容れつつ、連続的に続けられていく回忌法要には否定的であった。

## 6. 会員が檀徒になる契機

「妙瑞寺・檀徒名簿」を見ると112名が名を連ねる。そのうち旧来の檀徒が64名、会員であり檀徒でもある人が48名で、檀徒全体に占める【会員であり檀徒でもある人】は42.9%になる。一方、非継承墓である「安穩廟」と「桜葬」の会員は108名で、そのうち「会員」の身分のみが60名、「会員であり檀徒にもなった人」が48名で、会員全体に占める【会員でもあり檀徒でもある人】は44.4%になる。

先にも述べたが妙瑞寺では、日蓮宗の仏教寺院として会員は信徒と位置づけている。したがって妙瑞寺では、旧来の檀徒は64名で、会員でもあり檀徒でもある人は48名、会員=信徒が60名で、妙瑞寺の「檀徒」と「信徒」を合わせた檀信徒は172名である。

住職への面接調査から、会員であり檀徒でもある48名の「檀徒への移行契機」を整理すると、【墓を購入】したことで契約後、数年が経たころ寺や住職と馴染み、檀徒に移行するケースが20名(41.7%)と最多で、つづいて【葬儀を依頼】したことで檀徒になった人が14名(29.2%)である。【以前からの檀徒】が新しく安穩廟や桜葬を契約して【会員】になり【檀徒】を継続している人が10名(20.8%)。彼らはもともと檀徒であったわけだが、既存の墓地を改葬し安穩廟や桜葬に移れば妙瑞寺では「会員」と位置づけられ、この時点で「檀徒」になるかならないかの選択の自由はあったはずだが、そのまま「檀徒」であることを選んだ人たちである。その他【住職と親戚】であるという縁で檀徒になった人も4名(8.3%)いた。

「非継承墓」申込者への質問紙調査で、檀徒になろうと思った契機について、「どんなこ

とを契機に檀徒になろうと思いましたか？ エピソードやお気持ちをお書きください」と自由記述方式の質問を設けた。その記述からいくつかのサブカテゴリーを抽出し、サブカテゴリーからカテゴリーへと抽象度を上げていく方法をとって分析した(表1)

妙瑞寺の「檀徒」と「信徒」の定義では、檀徒は葬儀を依頼できるが、信徒はできない、という区別があることは先に記した。ゆえに「葬儀を依頼」したことによって檀徒になったというケースがでてくる。回答を見ていくと【葬儀を依頼】【墓を介して】【伝統仏教儀礼に価値を置く】【住職を信頼】などのカテゴリーが抽出された。

①【葬儀を依頼】では、「葬儀依頼が、檀徒になること」「自分の意志ではないが自然の流れ」「以前のほうが楽だった」といったサブカテゴリーが確認できた。そして下記のような記述があった。

- ・埋葬をお願いして数年は、檀徒になるものだと思い込んでいました。
- ・夫の葬儀の依頼で檀徒になりました。
- ・自分からの意志ではないが葬儀をお願いしたことで、自然の流れでした。

②【墓を介して】のカテゴリーでは「墓を持つと世話になる」「墓をもつと檀徒になる」「非継承墓が気に入る」「悲嘆が癒された」といったサブカテゴリーが抽出できた。

③【伝統仏教儀礼に価値を置く】のカテゴリーは「檀徒になるものだ」「檀徒になって供養のつとめを果たす」といったサブカテゴリーから導き出された。記述の詳細は表1を参照されたい。

④【住職を信頼】のカテゴリーでは、自身の死後を寺の住職に託している様子がわかった。

#### 〈考察〉

ここで注目されるのは、「檀徒になるか否か」が選択可能であることを意識して選択している人は少なく、身内に死者が出て「葬儀を依頼」したので、妙瑞寺の規定によって檀徒になったケースや、死者が出てお墓を求めれば妙瑞寺に葬儀を依頼するのが当然、という伝統仏教儀礼が習俗として身につけている人たちが見受けられた。会員は「葬儀は仏式で」という意識は高いが「檀徒になる」という意志は低い。それは「自分の意志ではない、後日檀徒になることを知った」等という言葉からもわかる。ただしそれは「自然の流れ」とも捉えている。

表1 檀徒になろうと思った契機

カテゴリー	サブカテゴリー	記述
葬儀を依頼	葬儀依頼が、檀徒になること	・兄が急死し、実家のお墓をすでに安穩廟に移し、地元から離れて生活していた為、父の葬儀を依頼したが、後日檀徒になると知った。 ・夫の葬儀の依頼で檀徒になりました。それまではお墓の利用と義父母の月命日のお参りだけでしたので、正直言って気持ち的にも金銭的にも楽でした。

	自分の意志ではないが自然の流れ	・自分からの意思ではないが葬儀をお願いしたことで、自然の流れでした。
墓を介して	墓を持つと世話になる	・安穩廟でお世話になるから。
	墓を持つと檀徒になる	・弟が住んでいるところから離れたお墓に入っていたのですが、実父が亡くなった際に実母が「近くに移したい」というので探したところ、同じ宗派で見つかったので決めました。
	非継承墓が気に入る	・これから先、2人が没すれば跡を継ぐことについて3人の女の子には言っていません。(3人の女の子は各々、嫁いで姓が変わっており、自由にさせたいです) 各々の人生ですからね。 ・私の子供がお墓を3つ見ることになるので、出来るだけ近くで将来あまり負担にならないところを探したかった。
	墓で悲嘆が癒された	・私には心が落ち着く場所がなく、母が亡くなり一人になり、頼る人もいません。母は死ぬ前、自然葬を希望し、海や山を希望していました。(中略) だけれども自分の親の骨を海にまくことはできず、無理でした。私はそのころ母の遺骨とともにさ迷いました。いろいろなお寺へ電話し、ある一つの寺が私の話を聞いて、今の妙瑞寺を紹介され、たどり着きました。私は妙瑞寺に行き、話を聞いてもらい、泣きました。自然に涙が出ました。私はここならと思いました。ここ妙瑞寺で檀徒になり、母の遺骨を眠らせ、そして私もその日が来たら母と二人で眠ります、ずうっと。
伝統仏教儀礼に価値を置く	檀徒になるものだ、思い込み	・埋葬をお願いして数年は、檀徒になるものだと思い込んでいました。
	檀徒になって供養のつとめを果たす	・これから先、2人が没すれば跡を継ぐことについて3人の女の子には言っていませんので、わたし共で終わりますが、現在は良いとしても、親までの寺(神力寺)には、色々の勤めは、いつか機会があれば神力寺→妙瑞寺と思っています(3人の女の子は各々、嫁いで姓が変わっており、自由にさせたいです。) 各々の人生ですからね。
住職を信頼	住職に共感	・遠い親戚になった時点で。住職にお会いして共感した。

## 7. 継承制のない檀徒制について

質問紙調査の自由記述欄で「檀徒になって良かったと思うとき」について尋ねた(表2)。その結果、【供養ができるところ】【寺が頼れて心強いところ】といったカテゴリーに分けられた。【供養ができるところ】というカテゴリーでは、「故人が望み自分も納得する形」「月参りがいい」「供養が滞りない」「頼みやすい」「安堵感」といったサブカテゴリーが抽出できた。【寺が頼れて心強いところ】では、「丁寧・親切」「託せる」「環境・きれい」のサブカテゴリーが導き出された。【供養ができるところ】というカテゴリーでは、「故人が望み自分も納得する形」「月参りがいい」「供養が滞りない」「頼みやすい」「安堵感」といったサブカテゴリーが得られた。【寺が頼れて心強いところ】では、「丁寧・親切」「託せる」「環境・きれい」がサブカテゴリーとして導き出された。

続いて「最初に檀家にならなくて良いお墓だと知った時、どう思ったか」という質問の回答を見ていきたい(表3)。



「檀徒」の回答からは、【ニーズに合っている】と【意識なし】のカテゴリーが抽出された。「檀家にならなくて良いお墓」であることをあまり意識していない人もいたが、多くの人は妙瑞寺のようなシステムは「時代のニーズに合っている」と認識しているようだ。「自分の代は檀徒になる意志はある。しかし子どもの代までは想定していない」。「長男が選択できるので重荷にならない」点が良いと言っている。

「非檀徒」では、【選択自由】【檀徒でなくても供養してもらえる】【墓の良さととの連動】などのカテゴリーが抽出できた。特に「合同祭祀」があることによって「檀徒にならなくても将来にわたり供養していただけること」が良いと考えている。

〈考察〉

寺や住職が頼れて心強い点や、故人への供養ができることを檀徒の良さとしてあげている。そして、自分は檀徒としての意志があるが子どもの代まで想定していないという、一代限りの檀徒システムに満足している様子がうかがわれた。

特徴的なのは、檀徒において自由記述式の問への回答は少なかった点である。檀徒の有効回答数は27人であったが、「檀徒になろうと思った動機」への回答数は10と少ないが、同じ自由記述でも「墓で気に入っている点」は20と倍の回答があり、墓への関心の高さが見受けられた。

表2 「檀徒で良かった」と感じる時

カテゴリー	サブカテゴリー	記述
供養ができる ところ	故人が望み自分も納得する形	今の私のやり方で無理なくできることが良いです。お盆の終わりの8月16日には檀徒の方、みなさんと一緒に手を合わせることで、そして妙瑞寺のお寺の住職さんの立派な心温まるお経を聞き、母の供養が1年1年とでき、私の気持ちも落ち着きが出てきて、これが母の望む形であり、私が求めていたこと実感しています。
	月参りがいい	お参りをお願いすると、家に来ていただけるので良いと思います。
	供養が滞りない	父や水子の兄たちの供養を、滞りなく子供として出来ている安心感。
	頼みやすい	母の命日・お盆の供養をお願いしやすい。
		盆、彼岸のご供養をやって頂ける。 法事を頼みやすい。
安堵感	供養を目に見え得る形でしてもらっているという安堵感を感じるとき。	
寺が頼れて 心強いところ	丁寧・親切	お寺は檀徒であっても檀徒でなくても、いつも誠実に対応してくださっていますので、良かったと感じるときはありません（いつでもいいということ）。
		とても親切にいただき、心強いです。
	いつも丁寧でキッチンとした文面の書類を送っていただいているところ。	
託せる	自分に何かあった時に「お寺さんをお願いして」と子供に言	

		えること。
	環境・きれい	・何より母が好きだった田んぼや畑があり、そこも良かったです。 ・いつお墓参りに行ってもキレイなところです。

表3 最初に檀徒にならなくて良いお墓だと知った時、どう思ったか

	カテゴリー	サブカテゴリー	記 述	
檀 徒	ニーズ合っている	重荷にならない	長男が継承する時に、長男が選択できるので重荷にならないので良いと思った。桜葬を友人・知人に紹介する時に勧めやすい。	
		これからのニーズ	これからのニーズに合うと思う。	
		世の流れを得た	世の流れを得た形である。	
	意識なし	現代に合っている	今までの私を知る限りでは、まず檀徒になるのはふつうであると思っていましたが、ならなくて良いお墓と、いろいろな宗教をすべて同じにしていることが、今の形に合っていると思いました。だけれども私は小さなときから日蓮宗で、やはり、私の母を置く場所はいつも日蓮宗のお経の聞こえる場所が私の母には良いと思い、この妙瑞寺にたどり着きました。本当に安心しています。	
		契約者ではない	契約は両親がしたので私は知らなかった。	
		思ったことはない	特に思ったことはないです。	
	知らなかった	檀徒にならないで良いということを知りませんでした（理解していなかった?）。		
非 檀 徒	選択自由	改葬	先祖からの山間奥地で共同墓地にありました。親が死亡後現在地に転居した為、墓参りや清掃が疎遠と段々なってきた、何とかしなければと思っていました。ある日、グラウンドゴルフ仲間先輩の〇〇様と話し合いの中で良い話だと直感し即決定し、菊池住職へ申し込んだ次第です。今でも良い決断だったと思っています。更に日蓮宗も同じでなじみやすかったです。	
		宗教儀式にとられない	実家の墓が遠く、宗派、宗教儀式にとられない永代供養墓を探していた。自分で決められるので好都合。	
	墓の良さと連動	檀徒でなくても供養してもらえる	合同祭祀がある	「桜葬」使用規則第3条1に妙瑞寺の檀徒で桜葬会員として使用することができると書いてありました。檀徒であるか、ないかの違いがよくわかりません。檀徒にならなくても将来にわたり供養していただけること。桜の下で眠れること。継承者がいなくても利用可能なこと。など夫婦にとって安心できる事柄が多かったので申し込みを決めました。
		一代限り	都合良い	まず、自分（たち）だけの一代限りが前提でした。娘が2人いますが他県に嫁いだりして先々面倒をかけたくない。
			墓のニーズ合う	これまでの墓地が遠く、近いうえに住職の説明を聞き都合よいと思った。
	その他			気楽でした。

## 8. 結論

近年では、仏教寺院の危機を回避するために檀家制度を廃止した寺<sup>(7)</sup>が、「送骨」(全国から郵送されてくる遺骨を供養し永代供養墓等に納骨する)によって、経営の活性化を果たした事例が注目されている<sup>(8)</sup>。檀家制度を廃止して「囲い込み」をやめ、全国の万人を対象とする「送骨」は、一見、現代社会に適合しているかのように見えるが、視点を変えればそれは葬送儀礼や関係性の「簡略化」とも言えるのではないか。筆者は、墓や葬儀といった供養儀礼に重点をおき、その中で日本仏教における「家」システムからの離脱を試みた地方寺院に着目した。

これまでに筆者は、脱家システムを「集団から個人への移行」と捉え、新潟市の地方寺院である妙光寺(日蓮宗・小川英爾住職)が、檀家制と「非継承墓」申込者を会員とした会員制を並存させ、その結果、檀家数よりも会員数が上回り、供養儀礼による収益も会員のそれが上回って寺の経済基盤が会員制によるところが大きくなっていく状況を捉えた[井上2004:119-121]<sup>(9)</sup>。

しかし、今回の事例は「並存ではない」ところに新しさがある。檀家制を廃止し、継承を前提としない個人の自由意志による一代限りの檀徒・信徒という概念を持ち出し、既存の檀家もみな「檀徒」とした。いわゆる継承制からの離脱である。葬儀を依頼する権利を持って寺を護持する個人が「檀徒」、寺の活動に縁あって参加する人たちを「信徒」とした。

その結果、檀家要件もない非継承墓の申込者のうち、約4割が「檀徒」に移行している。住職への面接調査によると、檀徒への移行契機は【墓を購入】したことで(41.7%)が最多で、【葬儀を依頼】(29.2%)、【以前からの檀徒】(20.8%)、【住職と親戚】(8.3%)の順であった。やはり、非継承墓の存在は大きく作用していることがわかる。会員の自由記述回答からも【葬儀を依頼】【墓を介して】【伝統仏教儀礼に価値を置く】【住職を依頼】などのカテゴリーが抽出できた。

「妙瑞寺に墓をもった」ので、死者が出れば妙瑞寺に葬儀を依頼するのが当然と考える人が多い。よって会員は「葬儀は仏式で」という意識は高いが「檀徒になる」という意志は低い。檀徒になった人も「自分の意志ではない、後日、檀徒になることを知った」、ただしそれは「自然の流れ」とも捉えている。檀徒についての質問であっても、非継承墓の良さを書くなど、まずは墓が「非継承」であることによる安心感から寺や住職への信頼を深めていることがわかる。また、供養儀礼は妙瑞寺が行う「合同祭祀」でよいと考える人は「檀徒」にならず、伝統的な仏式の「月参り」や「法事」が死者儀礼として自然に身につけている人は「檀徒」になっている。その「檀徒」も、代々継いでいくものではなく、非継承(一代限り)というところに高い支持を得ている。

さらに加えるならば、現在の非檀徒へ「今後、檀徒になる意志はあるか」を問うと、「ない」という回答が多く、これだけ見ると檀徒になる人は少ないように見えるが、一方で「今後、葬儀などの供養儀礼を妙瑞寺に依頼する気持ちあるか」の問には、「ある」が一番多かった。非檀徒であっても今後、死者が出れば檀徒になる可能性が示唆された。

また、当然のことながら檀徒には「仏教（日蓮宗）」が多いが、非檀徒でも「仏教だが特定の宗派はない」（26.3%）が最多で、仏教を支持している人が相対的に多いことが確認できた。非継承墓を選んだ理由として「非檀徒」では「合同祭祀をしてくれるから」（57.9%）が最も多く、「継承しなくてもいいお墓だから」（55.3%）が続く。要するに檀徒にはならないが「合同祭祀」という形で仏教儀礼を行ってくれることに価値を見出していることがわかる。また寺や住職が頼れて心強いところや、故人への供養ができるところを檀徒の良さとしてあげている。そして自分は檀徒としての意志があるが、子どもの代まで想定していないと、一代限りの檀徒システムに満足している様子がうかがわれた。このように現時点で「人々は超世代的な連続を強いる墓の継承や檀家制度から離脱すれば、個人の信仰、個人の追悼形式として、慣れ親しんだ仏教式の供養を選ぶ気持ちがある」という仮説が検証できた。

## 謝辞

長時間にわたって時間を割き、聞き取り調査に協力してくださった妙瑞寺の菊池泰啓住職と、2017年8月の真夏の暑さの中、質問票に記入してくださった檀徒や会員の皆さまに、ここから感謝申し上げます。

## 註

- (1) 本調査の結果の一部は、調査が行われた直後の2017年9月16日に開催された日本宗教学会学術大会（於・東京大学）にて「仏教寺院における永代供養墓会員が檀信徒になる移行要因」という題目で発表した。その発表要旨は『宗教研究』91巻別冊に掲載されている。しかしそれは単なる調査結果の発表と短文の発表要旨であるため、脱継承を指標とした論文としては未発表である。
- (2) 継承を前提としない墓は、一般的には「永代供養墓」と呼ぶことが多い。しかしこの種の墓に、寺院が運営する墓が多いためであって、行政が運営者である場合は宗教行為が行えないので「供養」の語を使用せず「合葬式墓地」「合葬式納骨堂」「合葬墓」などと呼称している。よって、この種の墓の総称を「永代供養墓」と言うのは適切ではない。「永代供養墓」「合祀墓」のように①祭祀を強調した名称と、②形態面を強調した名称がある。形態面から見て個人墓、夫婦墓、合葬墓、総墓、集合墓、合同墓、樹木葬墓地があり、そのシステムも様々である。このように多様であるが、継承を前提としていないということでは共通しているので、筆者はこれらを「非継承墓」と呼ぶ。非継承墓とは、80年代後半に家族の変化や生き方の多様化を背景に登場し、特に90年以降にその数を増やした新形式の墓で、主に個人を単位とし、家族に代替する共同性を有した継承を前提としない墓である。この墓は80年代末では4基ぐらいしかなかったが90年代で急増し、2018年現在では日本中どこでも存在する墓の形態となっている。
- (3) 筆者は、新潟市・妙光寺（日蓮宗・小川英爾住職）が1989年に設立した非継承墓である

「安穩廟」を1990年当初から長年にわたり研究対象としフィールドワークを続けて来た。その寺の活動に賛同して参加していたのが、今回の調査対象である妙瑞寺・菊池泰啓住職である。菊池住職は妙光寺と同様の非継承墓「安穩廟」を妙瑞寺で建設し、その墓の空き区画がなくなるころ、筆者が企画し展開している非継承墓「桜葬」を開設した。筆者は、妙瑞寺を拠点の1つとしているNPO法人「これから葬送を考える会九州」(理事長・小出真理子)の顧問を引き受け、年に1回は交流している。

- (4) 『日蓮宗宗憲』には、「第75条 本宗の教義を信行し本宗及び所属する寺院の護持に当たり、檀徒名簿に記載された者を檀徒という。2 本宗の教義を信行し本宗及び帰仰する寺院の維持を助け、信徒名簿に記載された者を信徒という」とあるように、「檀家」の語はないことにも裏付けられている。なお妙瑞寺の用語の定義については「2. 大分・妙瑞寺とその改革」を参照されたい。
- (5) 菊池泰啓住職への面接調査や、妙瑞寺や本法寺のホームページによると、現在の臼杵市にあたる稲葉藩藩主・能登守信通の発願により当時、京都にある大本山本法寺の第18世日允上人を招じ創立された。日允上人は、本阿弥光悦の孫にあたり、「昌光山」は、本山本法寺山号「叡昌山」の「昌」と、本阿弥家ゆかりの「光」に由来するものと伝えられている。いわゆる京都本法寺の末寺にあたる。
- (6) 妙光寺「安穩廟」申込者の2003年1月15日現在の属性をみると、①「子どもが娘だけ」25.7%、②「息子がいる」22.2%、③「子どもがいない」19.7%が上位三位を占めた。東長寺「縁の会墓苑」申込者の六割が夫婦入会者で、その夫婦の子の状況では①「娘だけ」41.9%と最も多く、②「子どもがいない」35.5%、③「息子がいる」22.7%の順となった。この数値は1990年のものだが、一貫して変化がない。妙光寺と東長寺では2位と3位が逆であるが、妙光寺も3位までの属性は順位が入れ替わって推移している [井上2003:229-233]。
- (7) 埼玉県熊谷市・見性院(曹洞宗・橋本英樹住職)
- (8) 住職が、2012年6月、檀家制度を廃止し、「みんなのお寺」にした。400近くあった檀家は「随縁会」という会員組織になり、「檀家」を「信徒」に変えた。その一方で、遺骨を郵送(ゆうパック)で受けつけ永代供養墓に納骨する「送骨」サービスも始めた。全国から遺骨が集まり、永代供養墓の需要も増えた。見性院の信徒は以前の2倍の約800人になり、葬儀・法事も3~5倍になったという。マスメディアに取り上げられ、各地で「送骨」を受け付ける寺が現れ、ネット上では全国の永代供養墓と繋いだ「送骨納骨ネット」までできている。
- (9) 現在、妙光寺も檀家制度をとらず、檀徒・信徒制にしている。

#### 引用文献

- 井上治代 2003『墓と家族の変容』岩波書店
- 井上治代 2004「家族の彼方—『集団から個人へ』価値意識の転換」『岩波講座・宗教10巻 宗教のゆくえ』岩波書店 pp103-132
- 磯村健太郎 2011『ルポ 仏教、貧困・自殺に挑む』岩波書店
- 児玉 修 2003『仏教崩壊』文藝書房
- 水月昭道 2016『お寺さん崩壊』新潮社
- 灘上知生・岩田親静他 2016「宗勢調査に見る現状と課題—日蓮宗」櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院』法蔵館 pp149-179
- 大谷栄一 2016「寺院の日常的活動と寺檀関係—浄土宗」櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院』pp215-255
- 櫻井義秀 2012「過疎と寺院」大谷栄一・藤本頼生編著『地域社会をつくる宗教』明石書店 pp130-154
- 櫻井義秀・川又俊則編 2016『人口減少社会と寺院』法蔵館
- 上田紀行 2004『がんばれ仏教！—お寺ルネッサンスの時代』NHK ブックス
- 鶴飼秀徳 2015『寺院消滅』日経 BP 社



268  
(273)

キーワード

脱継承、非継承墓、檀家制度、檀信徒、墓の継承